

た。彼女にしても、強敵と思つた退魔特務官がここまであつさりと手中に落ちてくれるとは思つても見なかつた。笑みもこぼれ用という物だ。清美は美奈の視線を真つ向から、受け止め、キツとにらみ返した。氣迫のこもつた、射るような鋭い視線を向ける。

「……儂をこの程度でどうにか出来ると思つておるのか？」

美奈は一瞬びくつと怯えたように一步引いた。オドオドした態度というか、この性格は異形になる前から生来の物なのだろう。だが、圧倒的優位をふと思ひ出したのか、再び余裕の表情を浮かべる。

「強がりねえ、貴女の身体、淫虫の影響でもうトロトロなんでしょ？ たまらないんじゃない？」

そう言うと、人指し指でつつうーつと清美の顔の輪郭を撫でた。そして首筋をスリスリと摩擦していく。美奈の指はまるで死人のように冷たく、そのくせ、奇妙なまでに汗で濡れていた。

(う、く……)

魂衣に覆われていない剥き出しの火照つた地肌をナメクジのような指にこちょぐられ、背筋にぞくぞくとした奇妙な感触が走る。

「たかが虫ごとき、なにほどの……んっ、くう……」

「あらあら、顔が真つ赤よ？ それに、ほら、乳首もさらし越しにそんなにツンツンにしちゃって」

美奈の言うとおりでつた。呼吸をする度にトクントクンと脈動する乳首は、既にこれ以上ないほどコリコリに硬くしこつて、薄布とさらしの下からでも分かるぐらいに勃起していた。まだまだ成長段階の薄い胸も目一杯に張り詰め、なだらかな膨らみを作り上げようとしている。

「だまらっ……ぬかあ……!」

自分の性的反応を指摘され、顔がかあつと火照つてしまう。これは

異形の常套手段、まず心を切り崩そうとしているのだ、そうわかつてはいても、羞恥を煽られるとやはり耐え難い。

美奈は更に清美の恥ずかしい反応を指摘し続けた。

「それに……、そのお○んこ、もう濡れて染みになつてるじゃない、イヤらしい……」

確かに、魂衣の薄布と股布に覆われた股間は、じつとりと重い濡れ染みが形成されていた。股に一本線を引いたかのような状態になつてしまつている。濡れたせいか、秘裂がびつたりと布に吸い付いて、ほとんどその形を開示してしまつていた。ある意味、直接よりもフェティッシュでエロティシズムに満ちた状況である。

「……好きにはざくがよいわ、必ず切り刻んでくれる……!」

清美は受けた屈辱と恥辱を、怒りに転化することでそらそうと試みた。しかし、それは逆に美奈の思うつぽ、冷静な思考を失えば必ず心は墮ちてしまう。

「おお恐い恐い。じゃあその威勢が何処まで持つか、試してみるとしましょう」

という、女は口笛を吹いた。それを合図に他の女生徒達が群がってくる。

「なっ、何をする気じゃ……!?!」

「ふふ、このクラスの生徒達はみんな私の子供を寄生させてるのよ……私の言いなり。まずは、その硬くなった身体を解きほぐして上げる」

そういうと、女達は思い思いに手を伸ばしてきた。ある物は清美のさらしに包まれても分かるぐらいにツンツンに突きたつた乳首をコリコリと弄んでくる。

「くっ、くふううっ……!?! や、そこは……!?!」

小さな尖りから送り込まれてくる、息の止まるような快感電流。女は同性ならではの容赦なサイズで桃色の尖りを徹底的にいたぶった。時には優しく擦り、時にはきゅっつつねり、時には揉み転がす。

快感を激しく受け止める肉器官と化した乳首は、女生徒達の指責めにダイレクトに反応してしまった。胸の芯を押しつぶされるような快美な圧迫感が乳房の奥に残り、甘く疼く。べったんと呼んでも差し支えないようなおっぱいの内側で、快感の波動が乱反射した。

「はうっ!! あふ、くは……わ、儂の……そこっ、いじる……くふう……!!」

清美の体温が上がり、顔には微かに朱が差し始める。口では抵抗のそぶりを見せている物の、強気な瞳の端には涙が潤み始めている。

さらに、別の女生徒がもう片方の乳房を責め立ててきた。まだ隆起のほとんど無いおっぱいをくすぐるように、根本からくるくると輪郭をなぞりあげて、頂へと登る。

「くふうっ……!!」

むず痒い様な快美観が未成熟な乳房全体に走り、清美は思わずビクビクと背を仰げ反らした。まだ板にも等しいおっぱいであったが、快感受信器官としての要を立派になしていた。薄い胸乳を指先でやわやわと揉み捏ねられると、身震いするほどの快感が全身を駆け抜ける。

思わずいやいや、と身を揉んで上体を反らし、指責めから逃れようとする清美だが、指は巧みに追いかけてっん、っん、っんと微かな弾力を確かめるように胸をつつく。その度に清美の口から

「くふう、んう、はうん……!!」

と、甘えたような熱い吐息が漏れだしてしまう。

別の女生徒はなだらかなお腹をなで回してきた。さらさらした魂衣と、

清美の甘酸っぱくほの香る汗で濡れ始めた肌のしっとりとした感触を染しむかのようにゆつくりと人指し指でなでさすり、時におへそに突き込んでくる。そうされると、少女特務官は

「うっ……ふっ……!!」

と小さなうめき声を上げて、身を震わせてしまう。

(何故……じゃ、こんな、ところで……)

気持ちよかった。お腹をさすられるたびに、おへそのすぐ下できゅんきゅんと甘くうずき始める肉壺を直接撫でられているようで、お腹が段々甘く火照り始める。

「うふう……キモチイイかしら……? みんな私が仕込んだのよ?」

「……はう……。この程度……っで……は……張り合いが、ないのう……!!」

ともすれば甘い声になりそうなのを必死にかみ殺し、ゆるみそうになる腫を必死に吊り上げて清美は虚勢を張った。この手の魔物に対しては弱みを見せてはならない。心の弱みを見せれば一気につけ込んでくる。それが奴らの手だ。しかし、下級異形ならともかく、一クラスをまるまる乗っ取るような異形に対しては、そんな陳腐な心理戦は全く効果がなかった。

「あら? 下僕達のご奉仕じゃ高貴な清美さんは満足できないのかしら。なら私が直々に責めて上げる」

にやりと笑った美奈は、大きく開いた清美の股間に入り込み、布に覆われた秘裂をずりつと人指し指で擦り挙げた。

「ふむうんっ!!」

それだけで少女特務官の腰から稲妻のような快感が生まれ、全身を貫いていった。背筋が勝手にぐうんっとのけぞり、ギクギクと引きつっ



たように震える。

(な、なんじゃ……とおっ……!)

今まで感じたこともない肉悦に、清美はとまどいを禁じ得なかった。股間から発生した快感はいつまでもいつまでも腰でわだかまり、淫靡な熱を徐々に高めていく。

美奈はそんな清美のとまどいを余所に更に激しく股間を蹴った。布越しに透け始めた秘唇を丹念になぞり、膨らみ始めていた大陰唇をシコシコと揉み込んでくる。

「うきゅうううつ、くう、あ、あぁう!」

少女の未成熟な性感が、強制的に華開かされていく。なかばワレメの中に潜り込んでいた未成熟な敏感肉びらを引きずり出されて摩擦を与えられる。刺激を受け慣れていなかっただけの部分は清美に強烈なまでの快感電流をガンガン流し込んでいった。さらさらした魂衣越しに擦過されるたびに全身がガクガクと揺れ、腰がうねってしまう。

さらに扱かれるたびにぴりっ! ぴりっ! と強烈な快感電流が走り、腰の奥へと堪つていく。お腹の奥で起こっていた甘い火照りがより一層強くなり、キュンつと蠢動するのが自分でも分かった。

(あ、……儂……の……子垂……)

淫毒に冒された身体は、予想以上に自分の気力と精神力を奪っている。(このままでは……マズイ……)

女の手は責めを休めない。更に内側のびらびら、小陰唇を割裂き、奥で息づく小さな穴、膣腔にたどり着く。さらさらとした粘液を既に垂れこぼし始めていたそこは布にびつたり張り付いていたため、容易に指で探り当てられてしまった。

「んふ☆ エッチなあな、みいーつけた……!」

小悪魔のような笑みを浮かべると、女は浅く指を突き入れる。つぶつ……。

「ひゅうつっ!!」

人指し指の第一関節が、潜り込む。媚毒で敏感になった肉粘膜は、とても少女とは思えぬ淫猥さで侵入者を歓迎した。まだ完成しきっていない未熟なびらびらが指に絡みつき、使い込まれていない肉穴がきゅうつと締め上げる。

「はううう……!」

そのため、美奈の冷たい指の感触がはつきりと分かった。細い異物ではあったが、性的に興奮し、本能的に挿入を待ちわびていた膣は過敏なまでに反応し、悦びの信号を強烈なまでに清美の腰へと叩き込んでくる。

「ここ、キモチイでしょ……?」

そう言いながら、女は肉粘膜の内側をこりこりとかきこすった。

「ふわあ、わああああ!」

その瞬間、恐ろしいほどの快感が膣に走った。さらさらで紗のような心地よさを持つ魂衣越しに、熱く火照った肉粘膜を擦り廻られる。その気持ちよさは途方もないほどであった。膣の入り口がジンジンと熱く疼いて、切ない程の心地よさが胸の奥でわき起こる。

子宮が一気にきゅんっつと強く絞られ、愛汁がトプリ、という音すら立てて絞り出されて、女のゆびをしとどに濡らした。

漏れだした愛液を潤滑油にして、女の指は更に激しく動く。鍵状になった指が天井を、床側を、縦横無尽にかきこすり廻った。

くちゅくちゅ、にちゅつ、びちゅ、ぐちゅ……!

「ああ、ひいひい……、だ、だめじゃあああ、そこは、だめなのじゃあああ……!」

教卓に腰を下ろした少女を、ビデオカメラのレンズが見つめている。レンズの脇にある録画ランプは赤く点灯していた。カメラがとらえた映像は、学園中に中継されると同時に録画もされているのだ。綾佳の前にも大型のモニターが置かれ、己の姿を映し出している。

「だ……ダメ……ダメ……だあ……っ！」

粘液まみれになったコスチューム姿をフルフルとわななかせ、綾佳は苦しげな声を上げる。震える手は、何かに引かれるかのように、コスチューム股間部分の解除スイッチへと向かっていった。

言うまでもなく、排泄作業用の機能であるのだが、カメラの前でこのスイッチを押すと言うことは、性器から肛門に至る恥ずかしい部分を余すことなくさらされてしまうことを意味している。スイッチには生体パターン登録がされており、着用者以外の者が押しても反応しないようになっていたのだ。

「無駄だ。オマエノ肉体ハ、俺ノ支配下ニアル。サア、スイッチヲ押セ！」
必死の抵抗をする綾佳に異形の声がかげられる。

乳首から注入された毒液は、精神はそのままに、肉体だけを異形のコントロール下に置く魔性の毒であった。

強靱な精神力で肉体支配に抗う特務官であったが、その抵抗もむなしくスイッチが押されてしまう。

シユパンツ！ コスチュームを濡らした粘液の雫を飛ばしながら、股間部分が解除された。

「コレハコレハ、可愛イオマ○コダナ」

いやらしい響きを含んだ異形の声。

綾佳の秘裂は、童女のように無毛なピンクのワレメであった。慎ましやかに閉じ合わされた大陰唇はふっくらと肉厚で、その下に息づくミル

クティー色をした肛門も繊細な小皺を放射線状に引き結んでいる。

(こっ、こんな屈辱……)

秘めやかな部分を冷たいカメラの視線にさらし、屈辱の涙を浮かべる退魔少女。

「開イテ見セロ……モット奥マデナア！」

V字型に開いた指が、ワレメの縁にあてがわれ、閉じられていたスリットをクチチュリと割り開く。

内に秘められていたフレッシュピンクの媚粘膜があらわになった。

咲きほころびる寸前のバラの花弁を思わせる慎ましやかな小陰唇、柔らかな肉襞によつて閉じられた膣口、その上でツンと尖った尿口、薄皮に包まれたクリトリスまでもが、カメラの視線にこつてりと舐められる。



する程、温度を上げ、高まっていくのだ。固く閉じられていたはずの秘裂はチェーンソーにまさに切り開かれるようにこじ開けられた。

ふつくと膨らみ始めた大陰唇、そして小陰唇を布越しにしたたかに責め廻られる。

ぐちゅぐちゅぎちゅぎちゅちゅちゅ!!

「くうあああああああ!!!」

肉びらを強烈に扱きたてられる感覚は、また強烈すぎるほどの快感を七海へと叩き込んでいった。腰がジンジンと甘く痺れ、お腹の奥でジュンと熱いものが溢れ出し始めるのを感じてしまう。肉の責め具は休むことを知らず、七海を更に責め立てた。より強く密着し、膣腔、尿道の入り口を激しく押し揉み、掻きむしり、そして舐めしゃぶる。

(こ、こんなのつてえ、こんなのつてえ……!!)

人間では絶対にできない複合された責めが、超高速で最も敏感な部分に練り出されるのである。堪らなかつた。電流のような強い快感が腰の中で幾度も幾度もスパークし、背筋を駆け抜けて脳に達し、少女特務官を悩乱させる。目の前で、何度も何度も桃色の閃光が弾けているような気がした。

「あつひいいいいつっ……!!」

七海は涙を流し、口から涎を垂らしてその責めに感じ入った。背筋が勝手にのけぞり返り、自慢の豊乳がぶるぶると上下左右に揺れる。その先端ではすつかりとしこりきつた乳首がツンツンに突き立ち、魂衣を押し上げていた。

腰に溜まった熱はいよいよ昂ぶりを極めた。腰の奥が甘く煮解け、命の源からこぼれだした甘いスープがとろり、とこぼれ始める。ざわざわとざわめく膣道を通り抜け、溢れ出す。それは触手チェーンソーに弾か

れて、周囲に濃い淫臭を漂わせていった。

「おやおや……恥ずかしい臭いがしますね? それでも特務官なんですか? はしたない。ご覧なさい生徒諸君、特務官などと気取っていても所詮はメス、一皮剥けばこのとおりなのですよ!」

衆目が一層七海の肉体に集中した。それらは魅惑的に揺れる乳房に、そして濡れまみれて陰唇を透けさせ始めた股間に、突き刺さるように投げかけられてくるのだ。

「み、みないれえ、みな、みちや、やらあ……!!」

随喜の涙ににじんだ視界に、無数の視線が移った。男子生徒はあからさまにズボンの前にテントを作り、瞬きすらせずに食い入るように自分の痴態を見つめている。女子生徒は目をそらす者もいたが、好奇と、あざけりが入り交じった視線で興味深げに眺めている者もいる。

(はずかっ……しい……!!)

こうなつてくるとあらゆる攻撃を守る魂衣もタダの露出狂じみたフェティッシュなスーツでしかなかった。身を隠してくれない極薄の鎧が恨めしい。七海は顔を真っ赤に紅潮させて、羞恥に身を揉んだ。

「やめ……くふうううつっ!!」

栗色の髪を振り乱して悶えぬく七海。うなじからは玉のような汗が浮かび、首を振るたびにふわりと辺りに飛び散っていく。

股間は既にべちよべちよだつた。肉チェーンソーの粘液の所為もあつたが、自らこぼした愛液も大きい。ねっとりとした粘った粘液が魂衣の股布を重い青に濡らしていた。隠すべき恥ずかしい秘裂は、濡れて密着し、完全に透けてしまっている。そして、その上でトクントクンと脈動している小さな肉芽、クリトリスも同様であった。

邪悪な意志を秘めた責め具が底を見逃すはずがない。肉チェーンソー



続きは本編でお楽しみ下さい